せたかむい
発行・古平町史編纂室
文化会館 ☎42-2590
第197号・平成18・2・1

年表で読む 古平の歴史

《102》

果樹園芸 リンゴ ⑤

◇リンゴの生産額

大正四年からの町勢要覧では、果実という項目の中に含まれていてリンゴの生産額ははっきりしませんが、その他の記録から見て、その年による豊凶や景気にもよりますが五六トンから三七六トンの変動があり、平均して一六〇トン程度で推移していたように思われます。大正四年から昭和六年にかけての中で、大正七年に四六三トンというのが突出していてこれは省きました。

◇リンゴの収穫

リンゴは山畑といわれる傾斜地に多く栽培されていて、収穫したリンゴは籠（かご）に入れ天秤（てんびん）で運んでいましたが、これを一と肩（ひとかた）といい、百斤（約六〇キロ）でしたから担ぐには相当の重さです。平地の道路では荷車も利用されましたが、収穫の最盛期には天秤を担いだ人夫が列をなして船まで運んでいたといいます。

リンゴは生産者からの卸売りで、品種や大きさによって値段は違いますが一斤（一六〇匁）、大玉五銭・中玉四銭・小玉三銭くらい、また、ハネものや落ちリンゴは半値か三分の一くらいで町のかつぎ屋などに売られていましたが、落ちリンゴを売るのは子供の余禄としていたところが多かったといいます。

またこの時期にはトウキビが出まわり、同じように大・中・小によって一本二銭から三銭で売られていました。

◇リンゴの袋掛け

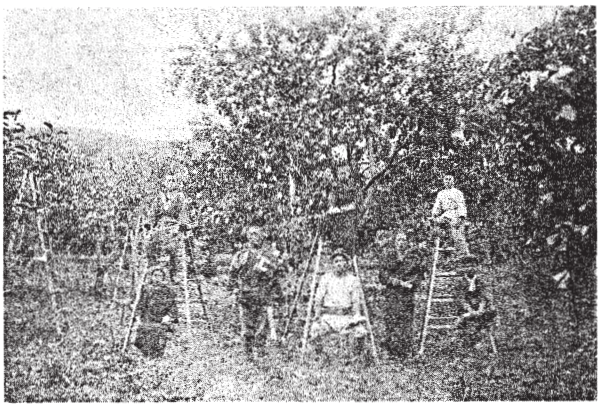
日本の農業は集約農業（一定面積の土地に多くの資本や労力をかけ土地を高度に利用する農業）と言われていますが、その典型とも言えるのが「袋掛け」です。一個一個の小さい実に袋をかけて病虫害から果実を守ろうというわけです。しかしこれだけに止まらないで、果実そのものの見栄えも良くなり、商品価値が大いに高まるというものです。しかしこれには大変な労力がかかりますが、そのための経費を差し引いても利益が上がるということから、昭和三〇年代までは一般に行われていた栽培法でした。

古平でももちろん行なわれていましたが、その時期になると娘さん達が、余市や仁木方面のリンゴ農家に泊りがけで袋掛けに出かけ、ちょうど古平のお祭りの頃にお土産を持って帰って来るので、その頃になると定期船は、お祭りに帰省する人や行商人などでごった返すのが常でした。

◇古平果樹栽培組合

古平のリンゴ園経営のほとんどは副業か、本業のかたわら雇人だけの小規模な経営でしたから同業者間の結びつきがなく、古平果樹栽培組合が設立されたという記録はありますが活動の様子などは全くわかりません。

リンゴ専業農家で戦後も残ったのは、チョペタンの石井さん、伊藤さんと、旭町の高野名さんの三戸くらいしかありません。



←本高野呉服店経営のリンゴ園（大正七年）

高野名幸作さんの日記から
当時の世相を見る
《108》

大正一三年　～　続く

▼九月一一日

起床六時、この頃では珍しい暑さになった。一天の雲もない青空で気持ちがよい季節だ。朝食後、自転車で農園行き、今日菊地さんがリンゴを小樽へ積んで行く便に託して、岡崎と木村さん、㊥へリンゴなどを送る。一〇時頃までに支度ができた。ナギで風があるので帆を掛けて行ったから、四時頃には小樽に着くだろう。正午、自転車で平へアバ縄を届ける。一時に囚の葬式を送る。妻は困おっかさん、八おっかさんを案内して農園へ行く。

▼九月一二日

起床五時、散歩すべく浜へ出て見た。町中はまだ電灯がついている。イカ漁の船が二、三隻岸に着いている、五、六〇程度の漁だった。沖では大謀が網を起している、大漁であってほしいものだ。今の浜までブラブラ散歩する、海岸からの眺めは何時見てもあきぬ。学校前から禅源寺の横を通り神道墓地の方へ廻り、関口、長尾、平田の墓標を拝す。この間まで元気であった人達が、早こうして亡き籍に入っている、世は流れる水の如きものだ。そこから道庁経営の苗圃を見る。三町歩もあるところへ落葉、トド、アカシヤ、その他たくさんの苗木が植えられている、これが成木になり、何時か古平の将来のためになるのだろう。三山神社の横の坂を下りて家に帰ったのは六時半で、程よい運動になった。妻は明日十五夜なので、青物取りに農園へ行く。観音滝祭りの準備のため、八時頃一四、五名が出かけた。九時頃銀行へ行く、支店長から去る四日の当選祝いの失敗談を聞く。午後農園へ行き、十五夜にお供えするカヤ、ハギ、リンゴ、ナシなどとって帰る。お供え物にするリンゴ、ナシなどを一〇軒ほどに配る。四時頃、四郎を抱っこして浜へ出て見る。共栄丸が一五、六人を乗せてイカつけに出て行った。

▼九月一三日

起床五時半、浜へ散歩に出る。一日増しに寒くなり、今朝などはセル一枚では寒く上に半天でもほしいようだ。一日ごとに秋が近くなるのだ、古平川辺りまで散歩して帰る。今日は仲秋の十五夜で、朝早くから青物売りが町を通る。八時頃、四郎をおんぶして浜へ出て見る。共栄丸がイカ大漁、多い人は八〇〇、少なくても三〇〇はとったという、近頃では大漁だ。浜も賑やかだ。九時頃から長野、原田さんらと観音滝の寄付を集めに歩く。中町、寺町、浜町の一〇四軒から五〇円ほどの喜捨があった。観音様のご利益で不平もなく頂けた。妻らは十五夜の支度で忙しい。運動した後でボタ餅の馳走はおいしい。六時頃二階を清め、お供え物を飾る。子供らも大喜びでご馳走を眺めている。今夜の満月を二階から眺めるとこうこうと輝いている。何となく遠くにいる人を懐かしく思い出される。泉さんの嫁さんの通夜に行く。帰り太で話し九時帰る。道路も明るく珍しいほどの十五夜の月であった。

▼九月一四日

起床五時半、朝夕はめっきり寒く火鉢が恋いしい。浜辺を散歩後、農園へ行く。熊さんは草取りなどをやっている、12号、旭などは大分色づき、14号は上味になった。七時に帰って朝食、運動して食べる食事はおいしい。観音滝の寄付集めに小野、長野さんと三人で歩く。二条通りから東大通り、土場、旭部落で一〇〇軒余りある、三六円ほど集まった。午後五時頃終わる。菊地さんが船に託して㊥からの自転車が送られて来た。熊さんと乗ってみたが、見栄えはあまり良くないが乗りやすい自転車だ。夜は旧十六夜の月光が冴えわたり、実に良い夜だ。外の寒いこと外套でもほしい程だ。向かいの末政さんの店では、青年達が集まってマンドリン合奏などやってなかなか賑やかだ。

▼九月一五日

今日は祝聖会例会日だ、昨夜

から心掛けていたので五時起床、洗面後早々に出かける。朝風が寒いので、セルの単衣に羽織を着ても寒い。梅野君と同道する。本堂ではお経が始まっている。会員六名が早参拝している。観音さんの前で観音経を上げ、のち和尚の部屋で観音滝準備の件について相談する。七時半帰る。朝早く起きて運動すれば気持ちもよい。秋空が晴れて気持ち良い天気だ。妻はこの天気で張り物をする。一〇時頃、長野さんと沢江方面へ寄付集めに出かける。沢江五〇余軒を歩き二二円程集まる。午後三時頃終り昼食をする。四時頃、自転車で酒井さんまで行く。㊐の庭園予定地を刈り払いし火入れをしている。地形が申し分ないところであり、池でも掘り、庭木を植え手入れをすればよい公園になる。この夜も一天雲なき良夜だ。

▼九月一六日

起床五時半、寒いこと初冬のようだ。顔を洗う手が冷たい。外へ散歩に出かけようと思い、寒いのであわせ(袷)にじゅばん、半天を着る。海岸を歩き、学校から新開町を廻り七時帰る。散歩後の朝食はおいしい。午前中は帳簿調べなどをする。14号買いの客が来て一斤四銭五厘で千斤程を売る。午後から熊さんと14号もぎをやる。五〇〇斤程もいで六時帰る。

▼九月一七日

起床六時、今朝は遅く起きたので散歩は見合わせる。風も寒くいよいよ秋だ。14号を買いに来た客があり、足りないので私と妻ももぐに行く、14号は味も良くなってきた。正午までに千斤程もぎ、四五円で売る。昼食は板倉の前にムシロを敷いて弁当を食べる。働いた後の食事は一菜でもおいしいものだ。四郎、トミちゃん、ユキちゃんも来て、木の下にムシロを敷いてリンゴやナシ、スイカなどを食べて喜んでいる。午後から6号の袋外しを五時までやる。

▼九月一八日

起床六時、朝寝したので海岸だけ散歩する。曇り空であったが、一〇時頃から雨が降り出す。熊さんはこの雨でも農園へ行く。私は倉の片付けをやる。割りと暖かい日だ。佐渡の竹内さんへスルメを小包で送る。雨も午後四時頃には晴れた。夜、㊐から使いがあり行く、札商生九名が修学旅行で積丹半島巡りをやるべく、今日古平に着き、吉井旅館にいるとのこと。札商には古平の仲谷石太郎が先生をしているとのことで、㊐おじさんと吉井旅館へ行ってみた。旅行のことなど話し、九時過ぎ帰る。なかなか元気がよい。こんな時代が一番楽しいようだ。帰ってから暫くぶりに一一時まで習字をやる。

▼九月一九日

起床六時、この頃はどうも朝寝をして困る、五時には起きたいものだ。天気もいいので今日は衛生掃除をやるべく支度をする。熊さんも農園から戻って来る。一〇時頃畳を出していたら突然、ひと雨ザァーときて驚いたが、すぐにカラリと晴れて上天気、秋らしくなった。三時頃までにすっかり終わった。夜、電気会社に禅源寺の和尚さん、長野さんらが集まり、観音滝の件につき協議する。寄付金は全町内からで二、五〇〇円余りになった。九時帰ったが、時々大雨が降り出す天気だった。秋の空だ。

▼九月二〇日

起床六時、海沿いを散歩する。昨夜まで汽船が七隻も停泊していたが、今朝は天候が回復したので出帆したのだろう。今日は西の宮の祭礼なので、朝にまず参拝をする。一〇時頃、西の宮で祈祷があり参詣する。余興も何もないのでさびしいことだ。午後二時頃農園へ行く。熊さんは6号の袋外しをやっている、本年は虫害も少なく玉も大きくなった。12号、旭は若木だが少々なっている。手入れすればこれから有望だ。袋外しをし五時頃帰る。農園へ出るのも気持ちがよい。夕食後、恵比須神社の寄付金集めに原田、㊐さんらと歩き、一七円余り集め八時終る。

▼九月二一日

起床五時、この頃では早起きだ。洗面後、海浜を散歩する。大謀は早出している。学校の方まで廻り、のち自転車で㊐の奥の畑まで走る。朝の寒風に吹かれて新鮮な空気を吸って走るのは実に愉快、庭園予定地の刈り払いした高台に上がる。四方の眺望がよいところで休む。何とも言えず気持ちがいい。朝寝していたのではとても味わえぬ。どんな良薬もこ

れには及ばぬ。今後とも朝起きと運動は務むべきだ。阿部の畑に寄りしばらく話し七時に帰る。天気快晴で八時頃農園へ行き、熊さんと7号の袋外しをやる。7号の玉の大きくなったこと、近年になく珍しい出来だ。昼食は例によって板倉の前にムシロを敷いて食べるが実においしい。午後から旭を一五〇程もぎ、㊥へ一斤四銭五厘で売る。夕方から大根の間引きをやる。ポツリポツリ雨が降り出す。

▼九月二二日

起床七時、雨が降って油断していたので近頃になく朝寝した。今日は雨がしきりに降り海は時化になった。熊さんはこれでもカラス番をするとて農園へ行く。私は雨降りを利用して障子張りをやる。妻はこの雨の中、田かあさん等とキノコ取りに行く。一時頃出かけ、六時頃真っ暗になってから帰ったがたくさん取って来た。一升一五銭もするそうだ。夜は皆でキノコこしらえに忙しい、一時間程もかかった。

▼九月二三日

起床五時、まだ薄暗かったが洗面後、早々に浜へ出て散歩、朝の新鮮な空気は実にいい。今日は彼岸の中日なので禅源寺へ参る、墓参したが、高台から遠く対岸が見え見晴らしがよい。雨が降り出したが帰ったのは六時半、朝食もおいしい。妻はこの雨に㋕、田かあさん等と六時頃またキノコ取りに行ったとのこと。私は障子張りをやる。この日は一日中降ったり止んだりで秋空らしい。夕方、妻はズブぬれになって帰って来る。キノコは担ぎ篭いっぱいも取って来た、この雨の中元気なものだ。夜はまたそれをこしらえるのに忙しいことだ。

▼九月二四日

起床五時、浜を散歩した後、古平橋の上流まで行く。秋の川はきれいだ、遠くにアユ孵化場のテントが見える。雨になったので帰る。一〇時頃まで降ったり晴れたりだったが、次第に晴れてきた。私は残りの障子の張り替えをやる。妻は午後から農園行き。明日は㊥さん等がリンゴを積んで小樽へ行くので、岡崎、㊥行きのリンゴを支度する。子供等も四時頃から農園へ行き、カメナシ、リンゴ、スイカなどを食べてきたと喜んで六時頃帰る。畑へ行けば今は一番楽しい時期だ。夜、裏庭で漬物用の枝豆もぎをやる。

▼九月二五日

起床五時、今朝はずいぶんと寒かった。海岸を散歩すると、ちょうど太陽が海の上に赤く出るところ、朝日の出る時は壮観だ。学校前から畑通りを通って農園まで行く。昨日の雨で露のひどいこと、下駄も足袋もビッショリだ。熊さんは鉄砲を持ってカラス追いだ。六時半に帰る。㊥さんらがリンゴを積んで行くので、岡崎、㊥行きのリンゴを託す。九時から農園へ行き熊さんとリンゴの袋外しをやる。今年の阿部7号の玉の大きいこと実に見事だ、品評会でもあれば確かに一等賞だ。これを見ても袋掛け中に充分玉は間引かねばならぬ。二時頃から急に大雨になる、秋空はアテにならぬものだ。袋外しもできないので三時頃帰る。間もなく晴れたので自転車で㊥へ行き、余市入の姉さんを訪問、昨日からの礼を述べ、カメナシを上げ五時頃帰る。明日は学校の遠足だというので子供らは喜んで早く休む。天気であってほしい。

▼九月二六日

起床五時、彼岸の終わりなので寺参りをする。寺の鐘がゴーンと鳴っている。海岸を散歩後お寺へ参る。朝のうちは珍しい天気、この分だと遠足によい日だ。子供らは握り飯、リンゴ、キャラメルだと喜んで出かけたが、九時頃から一天にわかに曇り、ゴロゴロと雷が鳴り大雨になる。生徒らはどの辺まで行ったやらと父兄は皆心配していた。雨はその後も降ったり晴れたり、二時頃、子供らがベチャベチャになって帰って来た。聞けば文治と吉治は観音滝まで、トミは泥の木まで行ったとのこと。せっかくの楽しみにしていた遠足もかわいそうであった。私も三時頃、甚内さんのところへ行ったが帰りは大雨にあい、ようやく㊀の板倉のところで雨宿りし帰った。今日は彼岸でオハギの馳走がある。

▼九月二七日

起床五時、朝の内は雨で道路が悪く、散歩もできないので浜まで行って帰る。寒暖計は五五度F（約一三度C）まで下がり霜でも降りそう、周りの山はまだ青いが、あと一四、五日もすれば紅葉す

るだろう。熊さんは雨の中、カラス番とリンゴ買いが来るというので農園へ行く。私は九月分の目録書きをやる。父はこの頃気持ちが良いと、家の裏で薪の始末などをしている。夜、原田さん、良一さんらと恵比須神社の寄付に一〇余軒歩く。

▼九月二八日

起床五時、例によって海岸を散歩。大謀はこの頃漁が思わしからず。本陣の浜には川崎船二隻入港している。五、六年前だと今頃はリンゴの積み出しで、担ぐ人やら川崎船へ積み込む人でずいぶん賑やかであったが、この二、三年で大半のリンゴの樹を切り、産額は一〇分の一ぐらいになったのでさびしい。リンゴも熱心にやれば間に合わぬことはないと思うが。家では熊さんが熱心なので、腰折れせぬように今後やってゆかねばならぬ。今日は母の命日で禅源寺へ参る。学校では高等科二年生が積丹灯台まで一泊旅行するとて、ワラジがけで集合している。私らも小学校時代灯台まで旅行し、野塚で一泊したがおもしろかった。あれから早二五年余りが経っている。寺から帰り修証義をあげる。熊さんは午前中目録配り。午後から私も農園へ行き、熊さんと9号、49号の袋外しをやる。この天気まわりに袋を外して色良くせねばならぬ。妻とヨシさんは小豆もぎや枝豆とり、夜は枝豆もぎをやる。

▼九月二九日

起床六時、海岸を散歩する。保木回漕店では住宅を新築するとて土台の据え付け工事中だ。どこも不景気不景気で、浜町でも空き家が二〇数軒もあるという。新築とは景気が良い。古平～余市間の定期船扱いも充分営業になるものとみえる。今日は小春日和、熊さんは農園でカラス番とリンゴ売り、私は新地方面へ自転車で掛取りに出かける。留守とか待ってくれとかで二軒で五円程だ。午後から浜町方面を廻ったがやはり同様で五円程、これでは貸し方もイヤになる。

正の姉さん、五、六日前から不快のところ重態の由、心配なことだ。実に世の中は心配が何時起こるかわからぬ。

▼九月三〇日

昨夜、枝豆を食べ過ぎたのか今朝は腹具合が悪い。一〇時半頃まで休んでいて散歩もできぬ。熊さんは集金に出かける。月末なので出納の方もなかなか忙しい。夜、本へ行きおじさんといろいろ話し、話のついでに蕉堂から買った絹本一二枚を売ることにした。三年余りもタンスの中に入れて置いたのでは何にもならぬので、二四円で売った。これは貯金でもするつもりだ。帰って先日から話しのあった一枝さんの縁談のこと、右近さん(本人のことを書いて送った。どうもこうゆう文章は、心に思いつつもなかなかうまく書かれぬ。こうゆう手紙は実際おっくうなものだ。

▼一〇月一日

昨日よりの雨、少しも止まずに降る。禅源寺祝聖会の例会日、五時起床。土砂降りに風も加わりひどい天気だ。五時一五分出かける、外套に足駄、かさでようやく行く。本尊と竜神さんへお経を上げているところ。終って観音経をあげる。皆もだんだんうまくなり、声もよく出て揃うようになってきた。終って和尚の部屋で観音滝入仏式の相談があり、役割りなどを決める。私は供物係兼庶務係だ。八時に帰る。雨は止まず海は大時化になった。

▼一〇月二日

起床七時、今日は朝寝をして散歩もできなかった。雨後の天気は一天雲もなき快晴、天高くして馬肥ゆるとは今日のような天気だ。熊さんは朝早くから農園へ行ったが、この頃はカラスがうるさくて、遅く行くとリンゴ、ナシなど二、三〇斤は落されているとのことだ。あと一五、六日はカラスの番をしなければならぬが、明日からはまだ早く行くと言っている。妻は㋕かあさん、八姉さんとキノコ取りに行く。五時頃帰って来たが、聞けば沢江の山の方は無くて、スリバチ山の方まで行って来たという。困の大阪のおじさんとお京さんが午後四時の末広丸で出発するとのこと。おじさんは今回は百日以上も居られた、これから困へ行ってもさびしい。夜、堀内与助さんの通夜に行く、△さんの大久保彦左衛門といわれた人だが惜しむべしだ。観音滝道路の視察を兼ね、準備のため高橋さんほか五、六名が行ったが、私は店の留守番で行かなかった。

（続く）

「正月休み」とは

大澤文子

「新年」・・・という節目にあたり改めて種々の事柄に心を寄せ、速やかに決めていかなければならない日々なのに・・・。連日のように空を暗めて降りつぐ雪！　雪！　道ゆく人々の合言葉は「もう雪はいらないよ！どうかしてよ！」の連発。

戌年は明けた。七草・・・成人の日とまたたく間に過ぎゆく日々、古えの仕来たりであろう、七草の日には七草粥を作る。セリ・ミツバ・ゴギョウ・ハコベラ・ホトケノザ・スズナ・スズシロ等、現代人には馴染みのうすい名前もあるが、まあ似通ったみずみずしい野菜を求めて七草粥をすますと早、成人の日を迎える。

なんとなくペンを持ちつつテレビに映るスポーツマンの若者達に目をとめていると・・・突然なんの音か地響きをたてわが家の前を行ったり来たり。えっ、成人の日の祝日になに！窓越しにのぞき見をすると・・・なんと幾台かの排雪車であろうか、轟々と音をたて、うず高く積む雪の山を崩してゆくではないか、えっ、この成人の祝日の日になぜ？

例年にないこの新年早々の豪雪に休日を返上したのであろうか。感謝しつつしばらく手を休めてのぞき見をしていた・・・が、午後四時過ぎにはすべて終了したのか、幾台かの排雪車は意気揚々？　と音高らかに去って行くではないか。

ありがとう！　心から感謝し、白一色の平らな道路を眺め、フーと息づいたのは私だけではないであろう。

そして、「しばらくは大雪にならないでよー」と、心の中で叫ぶのだった。北国の人々にとって、ながい冬の唯一の華やぎと言えば、海を渡り流れ来る『梅便り』と言えそう。

太宰府の天満宮では現在でも、菅原道真公を慕って飛んで来たという謂れのある老木『飛梅』を大切にしている。

いつの日か次男に誘われ太宰府の天満宮に出かけたことがあったが、その時『飛梅』にそっと触れたあの弾みのある感触が今でも手の平に蘇る思いさえし、暮れには思い切って高値の紅梅・白梅の鉢を求めた。

玄関の棚の上に置き愛ほしんでいるが只今九分咲き。朝夕霧を吹きかけるのも朝々の仕事のひとつか。

やはり暮れに求めた甘夏柑のひと鉢、窓際に置いてみた。思う存分みどり葉をのばし、実を三個もつけた。実の熟すまでと気をつかっていたが、新年早々熟し終えたのであろうか、ふと触れたわが手のもとに一個落ちた。弾みのある柔らかさでホッとした。言うまでもなく幼な孫のために・・・冷蔵庫の片隅に収める。

ふと新聞紙上で目にとめた記事「正月休み云々」・・・と。ああそうか・私も「正月休み」と称しデパートへでも足をのばして見ようか。別にこれという事もなく、私はデパートの混み合う人群れの中にいた。海産物食品の売り場の中をぶらぶらのぞいていた。あっあるある、懐かしい寒海苔、もずく等々、ビニールの小箱に収まり買い手を待っている。

古平の海の味では？　フーッとあの頃、舅の好物だった海雲、朝食には必ずといっていい程、酢の物にして膳の片隅に載せたっけ・・・、人群れに押されながら懐かしい味の寒海苔、海雲を一箱ずつ求めた。女店員の包んでくれた紙袋をさげ、鮮魚の売り場に廻っていた。氷のかけらの上に、今にも跳ねそうな鰈が人待ち顔に鱗を光らせて私を見ている。

あゝあの頃、よく若ものがもっこの中に鰈を何匹か入れ、「おーい、持って来たよー」と持って来てくれたっけ。姑は手早く竹串に鰈を編み込むように刺し、四角に仕切った炉の中に火をおこし、一本一本さしこみ鰈を焼いていた。ぷちぷちと焼き上がってゆく鰈の香りは今でも忘れない。

思い出にひたり歩いているうちに疲れ、いつか地下鉄電車の中にいた。紙袋の中は重い。

ああー「正月休み」と称する私の計画も「疲れたァ！」のひと言か・・・と、日記の端に書いた。

―札幌通信 第37信―

雪が降る

吉川義雄

小路といっても、優に六メートル以上はあり、降雪があっても、毎年、それ程苦しめられずに切り抜けて来たのに、今年の雪は、いきなりドサリとやって来て、娘二人をテンテコ舞いさせている。

地震に次いで、中越地方の豪雪の報がテレビ画面にリアルに映し出され、排雪の苦労を、これでもかと実感させられる。

古平で、子供の頃から実感させられているから、つい

「あの程度なら・・・・」

と、余計なことを言ったからたまらない。何も出来ぬくせに何を言うか、という娘二人のきつい眼差しに合って、

「しまったッ」

と、慌てて昔語りの、出だし分で止めにした。

つい今しがたまで、見ていないから分からぬが、相当積もったと思われる。居間に続く、私の部屋の上が、ミシミシとキシンでいたが、どうやら静かになって、雪降ろしが終わったらしい。

私の方が、ホッとして煙草に火をつけていると、娘達が販売機のジュースを仕入れて帰って来た。私にも一本届く。

◇

皆で決めた、妻の納骨は、五月の桜の咲く頃としてあるから、それまでは、仏壇の横に白布に包まれて飾られてある。

わが家の仏壇は、全体が黒光りのもので、宗旨の上からも、余計な飾りや、色彩は無いから、本尊の背後が金色に輝いている以外は無愛想である。

仏壇の横を飾ることなど、思いもよらぬことであり、平常のご供養は、一年を通して、緑のオシキミだけで、うまくゆけば、そのオシキミに白い小花が一面に咲くことだけ。

◇

四十九日の間は、妻の遺骨が中心であるかのように仏壇は今まで通りでも、遺骨の扱いは部屋の中心で、様々な花に包まれて、女王様扱いであった。

四十九日が過ぎたトタン、葬儀屋さんが来て、いとも簡単にそれらを片付け、黒い仏壇の狭い横の空間に、押し込むように遺骨を飾っていった。

その日から、わが家の仏壇の左側の空間は、小さな空ビンに差し込まれた花々が、毎日数を増して、花園のようになった。

◇

雪が降る。今年の冬も、いよいよ本格的なものになって来たようだ。

さっきまで、屋根の雪を片付けていた、娘二人は、服装を改めて、街に出かけて行ったようだ。

花を買って来ることには相違ないと思うが、さっき勤行しているとき、でっかいユリの花が、間もなくツボを開きそうにしているのが見えて、やたら気になっていた。

花不要の仏壇に、数十年も慣らされてきた私にとって、わずかな空間とはいえ、これ程の種類の花を飾られると、別な興味も湧いてくる。

私よりも、遥かに信仰心の厚かった妻は、どんな心情で、この花々を受け取っているのだろうか。

仏が、数々の言葉で予告した通り、寂光の都に行く者は、その相貌が変わると。

◇

病院で、吐血しながら亡くなった彼女の顔が、時間を経るごとに温和な顔になり、葬儀　集まって下さった皆さんが、

「あら、笑っている・・・・」

と言う程、美しい相になっていた。

◇

雪が降る。うんと降れ。雪のある間、娘達の想いが花になって、精いっぱい仏壇横の狭い空間を埋めるだろう。気付いてみると、花ビンのスキ間に、南天の赤い実まで鈴なりについている。

郵便の輸送は、郵便局から委託された人が郵便物を背負って湯内村（現在の豊浜町）まで行き、そこで余市からの郵便物を受け取って戻って来る。その仕事を請け負っている人を逓送（ていそう）と呼んでいたが、歩き慣れた道とはいえ、かなりの激しい吹雪の日でも往復していた。郵便小包は定期船を利用していたが、一般の郵便物が定期船を利用するようになったのは戦後のことである。

新聞は郵送は別として、輸送は全て定期船だったので何日も時化が続くような冬の季節は、それこそ新聞が何日分かまとまって、ドサッと配達されることも珍しいことではなかった。

日用品のほとんどは、小樽～古平間を往復する運賃積みといわれる運送船に頼っていたので、往々に不足する物資もあったが、まずは日常生活に支障が出るということはなかった。

大正九年、浜町中村源次郎・梅野角蔵・梅野政治が共同で増毛町から和船共栄丸（二〇ｔ）を購入して、古平～小樽間の物資輸送を始めた。この船は一本マストに一三馬力の焼玉エンジンを取り付けた発動機船で、小樽まで約六時間で航行した。

共栄丸はそれまでの川崎船より時間が短縮され、運航時刻も正確であったことから利用者も多かった。その後、間もなく共栄丸は梅野政治の所有となり単独で営業を始めた。

共栄丸は昭和二年一二月三〇日、塩谷海岸で吹雪きのため座礁していた小樽市色内町大西汽船所有の第十一博多丸を発見し、危険をおかして船長江崎定吉外一八人の乗組員の内一四人を救助し（他の四人は自力で上陸）、後に人命救助で表彰された。

古平～小樽間の運送船は、注文主からの物資を小樽市内で買い入れて来て、予め契約している馬車や馬そりなどで配達することもあり、便利さから各船共に運航を支えるに充分な積荷は確保されていた。

大正年代から次ぎのような機帆船と発動機船が運航されていた。

機帆船

港丸　沖村　瀬川末彦
砂押丸　港町　笹谷喜太郎
安全丸　港町　本間半之助

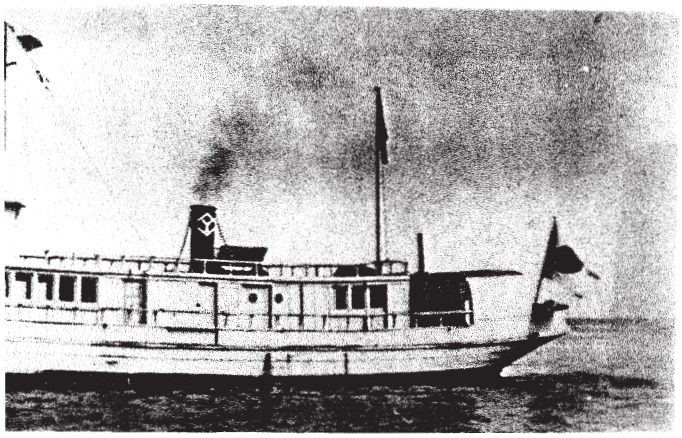
発動機船

勇丸　浜町　山田才太郎
長栄丸　港町　本間由太郎
安栄丸　浜町　本間万次郎
内田喜作
安全丸　新地町　渡辺宗作
共栄丸　浜町　梅野政治
共栄丸　浜町　今村登喜治
福栄丸　港町　本間三郎
第二福栄丸　港町　本間光男
平和丸　港町　本間清吉
開洋丸　新地町　熊木政次郎
澤山丸　浜町　寺田栄造
古平丸　浜町　高橋民蔵
斉藤　清

これらの運送船は船が古くな

古平の海運

移り変わりと平～小樽間の貨客輸送



昭和25年、役目を終え航路から消えた金華丸

るにつれ廃業し、昭和三三年、二級国道229号線・古平～余市間の開通により次第にトラック輸送へと移ったため廃業した。

金勝丸の時刻表（1往復）と料金

美国発	7:00	余市発	13:00
古平着	7:20	古平着	13:50
古平発	7:30	古平発	14:00
余市着	8:20	美国着	14:20

美国 ⇔ 古平 ⇔ 余市

夏期（5～10月）　40円　110円

冬期（11～4月）　40円　150円

美国⇔余市間　夏期150円・冬期200円

旅客輸送も戦後になり、海運局の基準も改正されたことから金華丸に代えて船を大型化し、初めてジーゼルエンジンを搭載した鋼鉄船金勝丸（七〇ｔ）が就航した。金勝丸は今までの定期船よりずっと大型の鋼鉄船であることから安心感があり、しかも速力一一ノット（時速約二〇・四㌔）という高速で、所要時間は二〇分余りも短縮されたので、利用する沿岸住民からは大いに歓迎された。

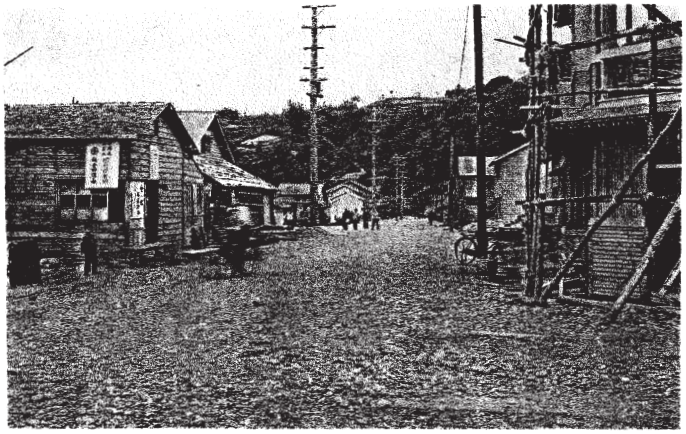
この航路は運輸省・北海道指定補助航路として余市汽船㈱が経営し、余市町では小原・甲谷回漕店が、古平町では岩井・能登回漕店（港町）・保木回漕店（浜町）がその取扱店となった。

余市駅から茂入の桟橋までは徒歩で一五分ほどであったが、この頃から乗用車のエンジンを外し、代わりにボディを馬に引かせた名物の馬動車が、駅から桟橋まで乗客や荷物を運ぶようになった。荷物の運賃を払うとサービスで乗るのは無料であった。

戦後間もない昭和二一年七月から小樽～古平間の直行便が運航され、正運丸（一五〇トン）が就航したが小樽発は偶数日、古平発は奇数日の同じ午前一一時発の片道便で、小樽駅を下がった辺りの埠頭から発着していた。

昭和二三年七月、北海丸（一〇三トン）代わったが、同年一〇月から二五年までは金勝丸が就航し、この航路を一時間四〇分程で運航していた。その後、小樽直行便が廃止になったことから、それまでの金華丸に代わり金勝丸が余市～美国間に就航することになった。

↑　長い間定期船として活躍し、昭和



←昭和二三年頃（大火前）の写真と思われる。向かって右・能登旅館、左側は現在ガソリンスタンドの位置、その建物の側面の掲示板に「金勝丸金華丸　切符販売所　能登回漕店」正面には「金勝丸　船客待合　切符販売所　能登回漕店」とある。金勝丸の「勝」の文字は紙に書いたもので、前の金華丸の「華」の上に張ったものであろう。

戦中 中ソ連

泣き笑いの樺太漁場体験記

戦後 ソ連

吉野慶一郎

ソ連国立銀行の支店長からの話を聞いて、私は「何をトボケたことを言うのか」と思い、

「それは死んだ父親の時のことであって、私には全く関係が無いと思うが、もし無理にもと言うのであれば、多額の貸し付けの際は当然抵当も入れてあるはず、また、当方の貯金や定期預金も相当の額があるのでそれらと相殺にしてほしい。かえってこちらの取り分の方が多いと思うぐらいです」

と主張したところ、

「日本人の抵当物件は今は消滅しました。預金、貯金などは、日本へ帰国してから拓殖銀行から支払ってもらいなさい」

これには開いた口がふさがりませんでした。実はこのとき通訳したのは偶然にも町の運送店の息子で、小樽の学校の先輩でもあり、ふだん遊びやスポーツも一緒にやり、時には飲み仲間の明るい男でした。

その父親というのは日露戦争直後に樺太に渡り、まだロシヤ人の多かった頃にロシヤ語を習得し、ロシヤ語はペラペラの達人でした。それで息子も自然と覚えたらしいが、それがいま通訳になっているのには驚きました。そこで私は彼に、もっと強くハッキリと上手に通訳してほしいとささやき頼みました。

「支店長さんのお話は、貸付金だけを支払えという要求ですがそれは一方的で無理なことです。今の状態ではとても支払い能力はありません。真岡検事局へ出頭して、救済をお願いする覚悟を決めています」

と、にわか通訳さんはロシヤ語辞典を片手に、懸命に努力してくれました。

「吉野さんは今、どんな仕事をしていますか」

と聞くので、

「漁業です。今は鰊場の最中でとても多忙です」

と言うと、

「それなら鰊漁で利益があるでしょう。一度にでなくても、都合つくだけで結構ですから支払うようにお願いします」

と、先の勢いから急転直下、もの分かりのいい支店長に変貌したのにはこちらが驚くばかり、検事局送りにもならずに済み、

「それでは、鰊場で利益が出たら必ず返済します」

とまずは約束して帰りました。

今日の支店長の言動には何か不自然さが見えるので、もしや日本人の貸付金を『猫ババ』でもするのでは、と一瞬ひらめいたので、「真岡検事局へ出頭してもいい」と言ったのが、或は功を奏したのではないかと思いました。

その晩、早速通訳の友達を訪ね今日の奮闘努力により助けられたことを深く感謝しました

「よく支店長の魂胆を見抜いたなァ。こっちが検事局をダシにしたのが向こうの弱味だったんだ。自分もいい勉強になったヨ。吉野さんの金額が多いので一番先に呼び出されたが、このあとの日本人の人達のために大いに頑張るぞ！」

と、頼もしい晴れやかな顔を見せてくれました。やっぱり友達はいいものです。

ソ連占領後の樺太へ赴任して来た官公庁はじめ民間各部の責任者や指導的な立場の人間は、本国では二流、三流の余された人物か、左遷されて島流しの形で送られて来たという感じで、上司の重圧から逃れて遠くへ来たという解放感からか、これ幸いと日本人を甘く見てはスターリン風を吹かせ、地位や職権を悪用して独断で日本人に難題をふっかけては、その見返りに甘い汁を吸うことばかりを考える、いやしいヤカラが多いように思いました。この後もまだまだ試練は続きます。（続く）

教科書のいま～むかし

◇国民学校と改称

昭和一〇年、「わが国の教育の現状から見て、その刷新と振興を図るにはどうしたらよいか」という問題から、内閣総理大臣の監督する『教育審議会』が設置され、この教育審議会がその後の教育改革に大きな役割を果たすことになります。

昭和一六年、教育審議会の答申によって、四月から国民学校が発足し、明治以来続いてきた小学校という名称は一時無くなってしまいました。

国民学校は初等科六年、高等科二年の八ヵ年で、今までより義務教育期間を二年延長して八ヵ年としました。しかし実際には、戦時中という事情から義務教育は初等科六ヵ年でした。

古平町でも高等科に在学すると授業料（二〇銭）を徴収していましたが、児童が役場の窓口に納入に行くと鉛筆一本を（ご褒美として？）くれていました。

◇国民学校の教育内容

国民学校令は学校の仕組みだけではなく、教育の内容、方法にも今までにないような画期的なものでした。

まず第一条には「皇国の道に則り、初等普通教育をする：：」とあります。皇国の道というのは、教育勅語というものに示されていることをいいます。そのため教科も国民科、理数科、体錬科、芸能科、実業科（実業科は高等科のみ）の五教科が設けられました。

国民学校では知識に頼るだけではなく、心身一体の教育を図るために、儀式や学校行事などが従来よりも重く見られるようになり、教科の指導と合わせて一体とし、学校全体を錬成の場とするような方法がとられるようになりました。

このことは太平洋戦争がだんだん悪化していく中で『道場』のような環境作りが進められていきました。

◇教科書も戦事色

文部省では昭和一六年から一八年にかけて、初等科の教科書を全面的に修正しました（第五期）。当然のこととして、上学年ほど戦時色の強いものでした。

← 第一　神国　一、高千穂の峯

国語では、軍隊や戦争に結びついた読み物、これらに関係の深いものを日本の古典や神話、歴史上の人物や物語から取材したものが多くなりました。

算数や理科ではその教科の性質から、特に戦時版というほどの修正はありませんでしたが、教材には軍艦、飛行機などが多く出てきました。

◇学校での授業を停止

昭和二〇年三月、教育制度ができてから初めてということが起きました。それは国民学校初等科を除いて、昭和二〇年四月一日から一年間、原則として学校での授業が停止されたことです。こうなると、ますます教科書だけが頼りです。

そこへさらに「戦時教育令」という法律によって、学校ごとに（中等学校以上）学徒隊などを組織して、戦時中の重要な任務に当るようにとの内容で、学校は授業を停止し、学校の教育という機能は全く失われたまま、やがて昭和二〇年八月の敗戦を迎えることになります。

戦中 中巻

泣き笑いの樺太漁場体験記

戦後 後巻

吉野慶一郎

今朝、早々と出漁したはずの船頭が突然戻って来て、

「大変なことになった。沿岸警備隊長が船に来て、『吉野サンのこの船は今日から出漁を差し止める。許可があるまで沖へ行くナ』と言うんだ。それでその理由は？　と聞くと『詳しいことは船主にする。帰って船主にすぐ出頭するように伝えること』と言われて、急いで戻って来た」

とのことで、船頭もすっかり心配顔での話でした。

これは何事なのか、一抹の不安を感じながらも、言われるままに隊長の許へ行きました。

「いったい今朝の出漁禁止命令はなぜなのか」

と尋ねたところ、

「それは、密航で北海道へ逃げるという疑いがあるからだ」

まことに簡単な答えでした。私は素知らぬふりをして、

「そのことは前にも話したとおりで、私どもは北海道へ逃げて行くなど全く考えてもいない。終戦後も漁業を続けて、今年も鰊場をやりソ連に協力しているではないか。逃げるなどということは絶対にしない」

と強い口調で抗議しました。

すると、途端に隊長はニヤリと笑顔になり、

「吉野サン本人は逃げて行くような人ではないが、どうも船が怪しい。なぜなら、今の船頭は昨年別の船で一度密航して、海馬島で捕まったという前歴がある要注意人物だからです。この船頭はどうも信用できません」

と言うのです。そこで私は、

「それでは、どうすれば隊長の気がすむというのか。では絶対逃げないという船頭と取り替えればいいのか」

と念を押すと、即座に、

「そのとおり――」

まるで勝ち誇ったような顔をして言うのです。

「それでは仕方がない。船頭を取り替えましょう」

と、約束をし帰宅しました。

帰って、船頭に隊長との話を伝えたところ、すでに船頭も隊長から同じことを言われていたとのことでした。船頭は、

「このままでは親方に迷惑がかかりますから、別の船頭を頼んで下さい」

とのことでした。

大変残念なことですが、この際お互いに辛抱することを話し合い、これからも強く生きていこうと言って別れました。

早速、次の船頭を探さなくてはなりませんでしたが、幸いにも適任者を見つけることができました。隊長に報告して了承も得られ、これでようやく元の出漁許可も下りて、先ずはとにかく一件落着となりました。

しかし、思わぬことから隊長の命で船頭を替えなければならなくなったという、何とも後味の悪い思いだけが残りました。気持ちのすっきりしない中で、前途に何か不安を感じないわけにはいきませんでした。

関連がありますので、ここで話は少しさかのぼりますが・・・

今年の鰊場の真最中に、戦後、旧拓殖銀行を接収したソ連国立銀行から書面で、「至急出頭せよ。応じない場合には真岡検事局送りの事件になる」などという、まさに脅迫状まがいの文面に、あっけにとられながらも出頭しました。

行ってみると、支店長（ソ連人）と通訳（日本人）の二人がいて、話の内容というのは、

「拓殖銀行の帳簿を調べた結果、吉野さんには貸し付けた残高があります。これを至急返済して下さい。これが今日の用件です」

と突然言われ、思いもしないことなのでこれにはビックリしました。

（続く）

カと暖かく空は青く、これで戦争さえなければ楽園だ。

そのうち敵の攻撃が始まり、慌ててまたタコ壺に入った。弾丸が尽きたのかわが方の重機関銃の音がしなくなった。敵の弾丸が円形陣地に集中しだし、敵が接近してきたようだが頭を上げることができない。目の前に積み上げた土に弾丸がプスッ、プスッと突き刺さる。こちらからも反撃しないと手榴弾を投げ込まれる。一発撃っては頭を隠すが、一発撃つごとに集中射撃のお返しがくる。困ったことに弾丸が無くなってきた。

敵を目前にしてこんな心細いことはない。敵の攻撃は激しく、日本兵が居そうなところへなめるように集中射撃をしてくる。周りから、

「やられた！」

「しっかりしろ！」

などと声が聞こえる。

いよいよ最後のときがきたか。俺も数え年二四歳でこの世とおさらばか、そう思ったとき気持ちは意外と冷静だった。どうせ死ぬなら一人でも多くの敵を倒して死んでやろうとタコ壺の中にへばりついていたが、どうしても浮かんでくるのは私をわが子のように育ててくれた祖母の優しい笑顔であった。

「死んではいけないよ」

と言っているような気がする。もう恐いものは何もない、

「さぁー来い、露助め！」

日頃鍛えた銃剣術で串刺しにして血祭りにしてやる。

その時、岸軍曹の、

「大隊長殿、前へ出ましょう、前へ出ましょう」

という声が聞こえてきた。すると間髪を入れず、

「第一大隊前へーッ」

大隊長の鋭い命令が飛んだ。

「それっ今だ！」

私達は弾雨の中をタコ壺をけって飛び出した。

「ウォー」というような皆の叫び声を聞いたような気がする。集中射撃を浴びる中、目の前の敵に銃剣をかざして突進した。周りの戦友が次々と崩れ落ちるようにツンドラの中に倒れていった。

「露助ども、くたばれ！　戦友の仇だ」

戦友の屍を跳び越えてしゃにむに突進した。

敵は日本軍のバンザイ突撃に恐れをなしたのか、自動小銃を撃ちながら一斉に退却し始めた。無我夢中で突進したので周囲の状況がどうなっているのか全く分からなかったが、気がついたら戦友の山家が私の後ろにいた。彼も生きていたのか。

しかし、よくもまぁあの弾の中を無事でいられたものだ。すぐ前にも敵の陣地があって、そこへ大勢の敵が逃げ込んだらしい。盛んに弾が飛んで来るが、敵兵のわめき声や泣き声も聞こえてくる。ここでまた撃ち合いが始まった。

その時、敵陣から何か黒いものが飛んで来た。と、傍にいた沢田上等兵がガバッと伏せた。私も山家も何だか分からないが反射的にパッと伏せた途端に、「ドカーン！」という大音響で爆発した。敵の大型の手榴弾だった。普通の三倍ぐらいの大きさで殺傷能力が非常に高いものだ。沢田上等兵が機敏に伏せたので私達もとっさに伏せたが、あと一秒でも遅れていたら私も山家もあの世行きだった。沢田上等兵は命の恩人だ。

手榴弾は二〇メートル程先の立ち木の陰から飛んで来たもので、チラリと敵影がみえた。私はすぐ立ち木のある草わら目がけて手榴弾を投げ込んだ。「どかん！」という爆発をみて、私達は一斉に敵陣に突入した。

勢いに押されてか敵は一斉に退却した。陣地は軍道の側溝を広げたもので敵の死体が山積みになっていた。敵は戦死者をここへ運んで来ていたらしい。ソ連兵は皆粗末な服装だったが大男ぞろいだ。

＜続く＞

橋義春さんの逝去を悼む

戦場での生々しい貴重な体験を執筆して居られる橋義春さんが、去る一月十一日逝去されました。樺太遺骨収集団として、また地域の老人クラブでもご活躍されておりました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。なお、遺された原稿がありますので、遺稿として続けて掲載いたします。

寒に入りて

瀧内優子

寒に入り視野の中なる裸木に思ふ凍てることなきその内側を
過ぎざまに鳴ける鴉をふり仰ぐ目に冴えざえと寒に入る空
寒冴ゆる今日の日差しの鋭きを撥ね返す如し氷柱のひかり
吹雪の夜を風に思ひある如く恨みごと言ふ口許さむき
冬海の音たかまると聞く夜はこころ鋭くなりゆくものか
わが歩幅守りつつ行く街角の信号機の青ゆらぎたる
突然に湧き来し涙何ならむ去年の家計簿読みつつ居りて
花の野も氷の原もありしかな冬日明るき街空見ぬつ
雪原は見放くるかぎり自ら起伏ありて影淡く曳く
峡ふかくゆきゆく径にしづるるは椴松林の笹竹の雪

編集雑記

▽漁村だと時期になれば漁模様が話題になるが、今年はどこへ行っても雪の嘆き節ばかり。信越の国境い辺りでの、身の丈を越すほどの屋根の雪下しを見ていると、古平はそれより少しはましか？と慰められるような気分だが、毎日の雪の始末にもうんざり、しかし現実は…となると、これはまさに雪とのたたかい――である。

▽広報・**ふるびら**の〈町長室から＝雑感〉には、いつもの身辺の話題から一転して今月号はなんと、激怒、とある、この豪雪に町長の恨み節――が。**【古平町豪雪対策本部】**の看板も、町の財政難の折から、どうもイマイチ気勢が上がらないように見える。

▽しかし、この雪で融雪期には今度は増水～洪水か。雪解けが遅れたら田植えだって心もとない。二次・三次の天災も…心配してたら切りがないが、こんなにも春が待遠しい年もない。

× × ×

「せたかむい」は、次ぎのようなところに置いていますのでご利用ください。

文化会館・役場・ふるびら温泉・古平郵便局・浜町郵便局（各50部以上）・福祉センター・元気プラザ・海洋センター（20～30部）、町外へは古平会などの団体や個人に計70部、また、町内の商店や個人で10部以上のところが何ヵ所かあり、通りがかりや、近いところなどは個人宅にも配付しています。新家寿司の田岸倉治さんは、毎月35部を知人へ自費で郵送下さっており、誠にありがとうございます。

現在、毎月550部を印刷しております。不足したときはせっかくお出でになった方に申し訳ありませんが、余っても仕様がないので当分この部数でいきます。今後もご愛読のほどをお願いいたします。

「せたかむい」200号に向けての原稿ですが、「写真でもいいか」というおたずねがありました。昔の写真は大歓迎ですので、お持ちの方はぜひお貸しください。

▼訂正　折り込みの俳句・**悠**［十二月号］とありますが、これは［**一月号**］の誤りです。

雑詠〔十二月号〕主宰水見寿男

空澄みて遠山紅葉燃えに燃え　山口悦子
草紅葉瀬音かすかや渓深し
一陣の秋風袂ゆすり去る
残菊や蕾にいのち托しをり

弧を描き鷲天空を上り行く　越野敏雄
白雲に鷲こつぜんと現はるる
白菜の陽光浴びし畑の列
白菜の大地狭しと積まれをり

羊蹄山に雲一つ置き秋惜む　高橋重子
澄む秋や山また山を後にして
スカーフを弄びゐる秋の風
友よりの近況添へてきりたんぽ

淡く濃く色を流せし秋の川　室谷弘子
鮭漁の船腹重し昼の潮
晩秋の積丹岬うねり初む
さらさらと風の流れに秋の声　外山俊久

夕暮れの茜の空を雁渡る
秋の日と流れる雲に天守閣
海に来て行秋しかと波に見る　渡辺嘉之
行秋や木立鋭く影やはし
ひと雨を貰ひ紅葉となりにけり
海渡る風つれづれに秋となる

大空にはぜたる枝の木の実落つ　堀典子
群れなして風を切りゆく黄連雀
秋風にからみつきたる波重し
秋天や一点黒く鳶となる

川漁の終へて堤の野紺菊　本間寿昭
鱗を待つ鮭選り分ける漁夫の業
星数へ漁火数へ月の道
指笛に鳶の一声初紅葉

【句評】

草木の露しぐれをり山の宿　越野清治
一瀑の吊橋遥か渦遥か
滝の渦二段三段真青なる
風と風ぶつかってゐる花野かな
上州の風と遊べる稲穂かな

【句評】

怒濤

【7】古平俳句会

―一月―

玉霰ドラムの如く屋根たたく　斉藤波留

聖樹の灯子等の聖歌で点灯す

粕汁や孫は嫌ひと眉ひそめ　山口悦子

蔦枯れて母子の如くからみゐる

寒夜空星の煌めく運河上　越野敏雄

寄り添ひし子鴨背にして赤れんが

冬空を持ち上げてゐる大クレーン　大和田絵伊

北国のしまきに出会ふ橋の上

凍雲を洩るる日差しのセタカムイ　高橋重子

枯菊もほのかな色香残しをり

雪やけの少し恥ふ少女かな　仲谷比呂古

苦言あり喜びありぬ古日記

初雪の兆しを見せて鉛雲　室谷弘子

鑑賞の余韻を残し冬の旅

木の葉散る殺風景といふ風情　外山俊久

白樺を静かに濡らす初時雨

冬ざれや浜を転がる波の音　渡辺嘉之

バス停に佇む人の息白し

冬ざれの夕暮の山風ばかり　堀　典子

船べりに撥ねてひたふる冬の雨

浜道を急ぐ学童暮早し　本間寿昭

神威岬沿海州の怒濤打つ

大鷲の磯を一瞥して去れり　越野清治

寒鰤の迫り来たるは遠目にも

短歌

古平町岬短歌会

荒れし北の海の漁にて君逝きぬ祭りのときの笑顔浮かび来く
池田テル

生まれきて初日拝せし今日の日を心に刻み平らに生きむ
金子寿子

たのしみて去年の秋より窓に置く鉢の福寿草少し咲きそう
坂本信子

女学生の孫らの賀状はおしなべて彩りゆたかに横文字多く
鈴木時子

静かにも足早にゆく看護師さん詰所の電話のベル聞こえおり
竹内コト

こんなにも雪の辛さを感ずるは長い年月はじめてのこと
田中香苗

正月に孫らの作りしかまくらもひと夜の雪に埋もれてしまひぬ
丹後初江

豊平ダムの水吐き出だす太鼓橋谷の七彩緑に映えて
寺田清治

入口に雪道つけてこもる日々日脚わづかに伸びしを思ふ
東美知

東雲のくれないに染む水平線に今し初日の昇りくるなり
堀典子

俳句

古平俳句会

末枯れて全山彩を失へり　斉藤波留

ずゝずつと屋根から雪の落る音　山口悦子

湯豆腐と専用鍋に歳重ね　越野敏雄

けあらしに朝日の映えて冬の海　大和田絵伊

山里は墨絵となりて暮早し　高橋重子

初雪の稜線うつすら浮き立ちぬ　仲谷比呂古

日溜を膝に置き行く冬の旅　室谷弘子

枯葉踏む音が後からついてくる　外山俊久

冬の朝鴉の声の金属音　渡辺嘉之

暁を掴まんとして冬木立　堀典子

山の啼き海の啼きたる霧氷林　本間寿昭

灯台を打つ冬波は力溜め　越野清治

古平町史年表

昭和17年（1942）～続く

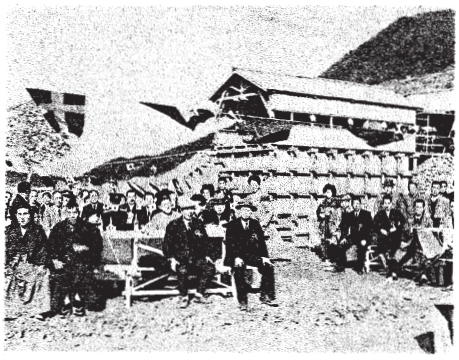
▲琴平神社で大東亜戦争(後に太平洋戦争と呼称)1周年記念式が挙げられ、戦没者慰霊祭も行われる
▲古平劇場で浜町全町内会の常会が開かれる
▲古平・美国両町の金物商連合会が開かれ、小売業者の整備令について協議する

昭和18年（1943）

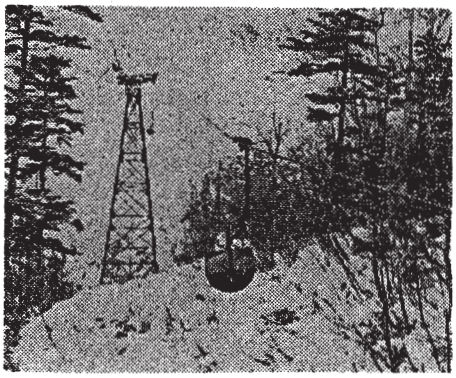
▲明和青年学校に部落会が校旗を寄贈する
▲古平森林組合が設立される
▲古平翼賛壮年団が結成される
▲水稲立毛共励会で榎本伝蔵が1等賞を受賞する
▲漁業資材の不足から、全道底曳網漁業者が抽選により3分の1の休業を申し合わせる
▲北海道中央乗合自動車㈱が、余市―古平間にバスを運行するが、ガソリン不足のため古平―美国間には木炭バスが走り珍しがられる
▲山本五十六元帥の国葬に学校では遥拝式をおこなう
▲琴平神社で国民勤労報国隊の結成式が行なわれる
▲明治30年以来続いた1・2級町村制が廃止になる（古平町は明治35年2級町村・同40年1級町村となる）
▲水産団体法により漁業組合組織が中央水産業会―道水産業会―（町村）漁業会となり、上意下達の体制となる
▲7月から全道の国民学校の始業時刻が午前7時と決められる
▲北後志在郷軍人武道会が古平国民学校で行なわれる
▲古平産業報国会運動会が中島グランドで行なわれる
▲古平国民学校に鐘に代えてベルが設置される
▲古平青年団主催の青年大運動会が中島グラントで行なわれる
▲余市町大川国民学校で小学生の相撲大会が行なわれ古平国民学校が団体の部で4位に入賞する
▲稲倉石鉱業所の出戸の沢選鉱所と第2索道（出戸の沢～港町貯鉱所間）が同時に運転を開始する
▲古平青年学校生95名が仁木村（町）まで行軍する
▲古平国民学校が、軍人遺家族援護学芸会を浜町・新地町の両劇場で開く
▲古平青年学校が一泊の宿泊をともなう2週間の特別訓練を行なう

↑馬そり・トロッコなどを使って翼賛壮年団による中島グランドの整備作業

木炭燃焼炉→
それを取り付けたバス↑



↑出戸の沢選鉱所の完成祝賀会



↑同時に運転を始めた第二索道